

経済価値ベースのソルベンシー規制

導入に向けた検討事項

【第7回】検証態勢の導入



有限責任あずさ監査法人
金融事業部 マネーシング・ディレクター
高橋 隆司

1. はじめに

全8回のうち7回目に当たる今回は、検証態勢について解説を行う。

本年6月に公表された「経済価値ベースのソルベンシー規制等に関する有識者会議（以下、「有識者会議」という）」の報告書では、経済価値ベースのソルベンシー（以下、会議の中では、内部モデル）の導入に向けた検討事項として、
下、「ESR」という算定における内部モデルや保険負債に対する検証態勢の導入を求める方向が示されている。ただし、誰が検証するのか（当局による審査／内部検証／外部検証、など）、どのように検証するのか、などの具体的な制度設計はこれからとなっている。なお、有識者会議の中では、内部モデルと保険負債のおおの検証項目につき、図表1、図表2が事例として示されていた。

図表1 ICSにおける内部モデルの受入条件

N o.	項目
内ー1	内部モデルのスコープが定義されていること
内ー2	厳格な内部モデルの検証プロセスが整備されていること
内ー3	取締役会による承認が行われていること
内ー4	統計的品質基準が遵守されていること
内ー5	校正テスト基準が遵守されていること
内ー6	ユーステスト基準とガバナンスが遵守されていること
内ー7	文書化基準が遵守されていること
内ー8～10	（部分内部モデルに関する規定）

金融庁「経済価値ベースのソルベンシー規制等に関する有識者会議 第7回事務局資料」より抜粋

図表2 保険負債の適切性検証で求められている要素

N o.	項目
負ー1	変動要因分析
負ー2	計算プロセス
負ー3	データ品質
負ー4	計算手法およびモデル
負ー5	前提条件
負ー6	現在推計と実績の比較
負ー7	感応度分析

金融庁「経済価値ベースのソルベンシー規制等に関する有識者会議 第8回経済価値ベース保険負債の適切性確保」より抜粋

図表3 実施基準における全社的な内部統制の評価項目の例

分類	評価項目（一部抜粋）
統制環境	経営者は、信頼性のある財務報告を重視し、財務報告に係る内部統制の役割を含め、財務報告の基本方針を明確に示しているか。
リスクの評価と対応	信頼性のある財務報告の作成のため、適切な階層の経営者、管理者を関与させる有効なリスク評価の仕組みが存在しているか。
統制活動	信頼性のある財務報告の作成に対するリスクに対処して、これを十分に軽減する統制活動を確保するための方針と手続を定めているか。
情報と伝達	信頼性のある財務報告の作成に関する経営者の方針や指示が、企業内の全ての者、特に財務報告の作成に関連する者に適切に伝達される体制が整備されているか。
モニタリング	日常的モニタリングが、企業の業務活動に適切に組み込まれているか。
ITへの対応	経営者は、ITに関する適切な戦略、計画等を定めているか。

「財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準」（令和元年12月6日企業会計審議会）より抜粋

図表4 フローチャートとリスクとテストの例

数理部門 ESR 算出部門 システム		リスクの例		テストの例	
	1 保有データ	1 前提条件作成のためのデータが適切に抽出されない	○	○	・類似の他の統計データと比較して妥当性を確認する ・計算基準日前後の取引データをサンプル抽出して保有データへの抽出の妥当性をチェックする
	2 前提条件作成	2 不適切な前提条件が作成される	○	○	・前回の前提条件からの変動要因を分析し、その妥当性を評価する ・（内部モデルの場合）標準モデルの前提条件との整合性を検証する
	3 承認	3 計算基準日の保有契約が適切に抽出されない	○	○	・類似の他の統計データと比較して妥当性を確認する ・ITの自動処理の有効性をテストする
	4 前提条件	4 目的に沿った適切なモデルが使われていない	○	○	・前期の計算値からの変動要因を分析する（変動要因分析） ・前期のモデルの計算値の中で、すでに発生している実績値とを比較する（バックテスト） ・前提条件を変動させた場合の計算値の変動を分析する（感応度分析）
	5 保有データ	5 保険負債が正確に計算されない	○	○	・計算データをサンプル抽出して再計算する ・ITの自動処理の有効性をテストする
	6 モデル計算	6 計算した値と異なる値がESR計算に使われる	○	○	・ESR計算シートに正しく転記されていることを確認する ・リスク管理部門や内部監査部門による検証内容をレビューしてその有効性を確認する

出典：筆者作成

2. 全社的な内部統制の評価

全社的な内部統制は、企業全体に広く影響を及ぼし、企業全体を対象とする内部統制である。実施基準では、図表3のような評価項目が例示されている。ESRの検証業務では、「財務報告」を「ESR」と読み替えて適用することが考えられる。

なお、この考え方等の基本的概念については、企業会計審議会の「財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準」（以下、「実施基準」という）を参考にする。

これらの項目は、図表1、図表2の次の項目と関係が深いと考えられる。
▽内ー2：厳格な内部モデルの検証プロセスの整備
▽内ー3：取締役会による承認
▽内ー4：統計的品質基準
▽内ー6：ユーステスト基準とガバナンス

3. 業務プロセスに係る内部統制の評価

業務プロセスに係る内部統制の評価については、ここでは、保険負債測定の業務プロセスを題材に例示する。

最初に、保険負債を測定し、ESR報告に使用するまでの取引の流れ（開始、承認、記録、処理、報告を理解する。通常、フローチャートなどを用いて図式化することが多い。

次に、その業務プロセスにおいて虚偽記載が発見されるリスクを識別する。実施基準では、このリスクを識別するに当たり、不正または誤謬（ごびょう）が発生した場合に、「実在性」「網羅性」「権利と義務の帰属」「評価の妥当性」「期間配分の適切性」「表示の妥当性」といった適切な財務諸表を作成するための要件のうち、どの要件に影響を及ぼすかについて理解しておくことが重要、と説明されている。

さらにその次に、このようにして識別されたリスクに対するテストを実施する。

図表4はフローチャートとリスクとテストの例である。

これらの項目は、図表1、図表2の次の項目と関係が深いと考えられる。

▽内ー4：統計的品質基準
▽内ー5：校正テスト基準
▽内ー1：変動要因分析
▽内ー2：計算プロセス
▽内ー3：データ品質
▽内ー4：計算手法およびモデル
▽内ー5：前提条件
▽内ー6：現在推計と実績の比較
▽内ー7：感応度分析

4. 保険会社が整備しておくべき態勢

前述のテストを実施するにあたり、保険会社は、それに耐えるために、次のような態勢整備が必要と考えられる。

▽承認行為のエスカレーション：内部モデル（に基づくリスク量）や保険負債を含む、ESRの承認行為を、担当者レベルから、経営者を含む上位レベルにエスカレートする。

▽チェック体制：経営者等の承認行為を担保するために、保険会社内にESRのチェック体制を構築する。

▽ITガバナンスの高度化：内部モデル（に基づくリスク量）や保険負債の測定はITシステムに依拠する所が大きい。ため、これらを重要なIT基盤と認識し、管理体制を高度化する。

▽文書化：監督当局などの独立した第三者が、ESRの測定方法や、それに対する内部統制を理解できるレベルの文書を作成し、維持する。

これらの項目は、図表1、図表2の次の項目と関係が深いと考えられる。

▽内ー2：厳格な内部モデルの検証プロセスの整備
▽内ー3：取締役会による承認
▽内ー4：統計的品質基準
▽内ー7：文書化基準
▽内ー3：データ品質

5. まとめ

第7回目の今回は、検証態勢につき事例を交えて解説した。有識者会議の報告書を踏まえ、これらに対する制度が具体化

されていく予定であるが、対応する保険会社は、要求された検証業務に対し、ここで解説したような観点を適切に理解することが重要である。

今回は、最終回として、これまでのまとめを行う。（なお、本稿内容については20年9月末時点での調査情報に基づいていることに留意いただきたい）

◇

【高橋隆司（たかはし りゅうじ）氏のプロフィール】日本アクチュアリー会正会員、年金数理人、日本証券アナリスト協会認定アナリスト。日本アクチュアリー会国際関係委員会委員、日本年金数理人会試験委員会委員。大手保険会社に通算14年間在籍後、2003年KPMG（あずさ監査法人）入社。保険会社に対し、責任準備金の監査業務に従事する他、リスク管理、IFRS17などのアドバイザリー業務を担当。

【著書など】「図解＆徹底分析 IFRS『新保険契約』（中央経済社、共著）」「保険業の会計実務」（中央経済社、共著）。

【講演など】損保総研、保険フォーラム、KPMGフォーラムなど、各種セミナー講師実績多数。

【専門分野】保険数理、リスク管理、IFRS17など。